

Ⅲ 耕地の利用状況

1 農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率（平成30年）

(1) 田の農作物作付（栽培）延べ面積は223万6,000haで、前年並みとなった（表14）。

田の耕地利用率は93.0%で、前年に比べて0.1ポイント上昇した（表14）。

(2) 畑の農作物作付（栽培）延べ面積は181万2,000haで、前年に比べ1万6,000ha（1%）減少した（表14）。

これは、大豆及び飼料作物の作付（栽培）面積が減少したためである。

畑の耕地利用率は90.0%で、前年に比べて0.2ポイント低下した（表14）。

(3) この結果、田畑計の農作物作付（栽培）延べ面積は404万8,000haで、前年に比べ2万6,000ha（1%）減少した（表14）。

田畑計の耕地利用率は91.6%で、前年並みとなった（表14）。

表14 平成30年農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率

区 分	田 畑 計				田			畑		
	作付（栽培） 延べ面積	前年との比較		耕 地 利用率	作付（栽培） 延べ面積	前年との比較		作付（栽培） 延べ面積	前年との比較	
		対差	対比			対差	対比		対差	対比
	ha	ha	%	%	ha	ha	%	ha	ha	%
作付（栽培）延べ面積	4,048,000	△ 26,000	99	91.6	2,236,000	△ 11,000	100	1,812,000	△ 16,000	99
水 稻（子実用）	1,470,000	5,000	100	-	…	nc	nc	…	nc	nc
麦 類（子実用）	272,900	△ 800	100	-	171,300	△ 300	100	101,600	△ 500	100
大豆（乾燥子実）	146,600	△ 3,600	98	-	118,400	△ 2,400	98	28,300	△ 1,100	96
そば（乾燥子実）	63,900	1,000	102	-	38,100	0	100	25,800	1,000	104
なたね（子実用）	1,920	△ 60	97	-	…	nc	nc	…	nc	nc
そ の 他 作 物	2,093,000	△ 27,000	99	-	437,200	△ 13,100	97	1,655,000	△ 15,000	99
耕 地 面 積	4,420,000	△ 24,000	99	-	2,405,000	△ 13,000	99	2,014,000	△ 12,000	99
耕 地 利 用 率	91.6%	△0.1ポイント	…	-	93.0%	0.1ポイント	…	90.0%	△0.2ポイント	…

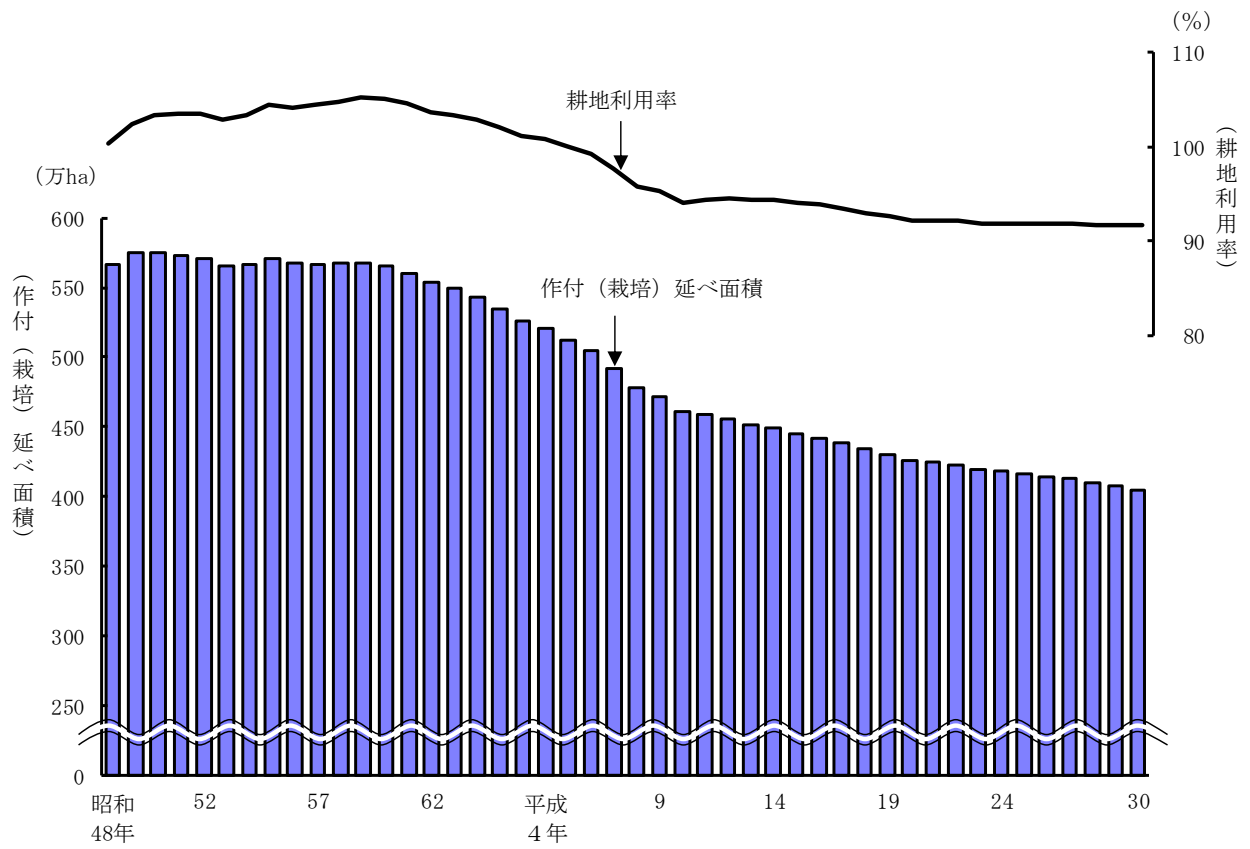
注：耕地利用率とは、耕地面積を「100」とした作付（栽培）延べ面積の割合である。

$$\text{耕地利用率（％）} = \frac{\text{作付（栽培）延べ面積}}{\text{耕地面積}} \times 100$$

(4) 作付（栽培）延べ面積の動向をみると、昭和49年から昭和60年は麦類の生産振興による作付面積の増加等からほぼ横ばいで推移した。昭和61年以降は作物ごとに増減はあるものの、総体的には減少傾向で推移している（図12）。

(5) 耕地利用率の動向をみると、昭和48年から平成4年までは100%を越えていたが、平成5年に100%となり、平成6年には99.3%と100%を下回った。平成7年以降はほぼ低下傾向で推移し、平成23年以降はほぼ横ばいで推移している（図12）。

図 12 農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率の推移



2 夏期における田本地の利用状況

(1) 平成30年夏期（おおむね水稲の栽培期間）における田本地の利用状況をみると、水稲作付田は159万2,000ha（青刈り面積を含む。）で、前年並みとなった。

水稲以外の作物のみの作付田は40万7,300haで、4,500ha（1%）減少した。

また、夏期全期不作付地は27万3,400haで、300ha増加した。

この結果、田本地に占める水稲作付田の割合は70.0%、水稲以外の作物のみの作付田の割合は17.9%、夏期全期不作付地の割合は12.0%となった（表15）。

表 15 平成 30 年夏期における田本地の利用状況

区 分	面 積	前年との比較		構成比
		対 差	対 比	
	ha	ha	%	%
田 本 地	2,273,000	△ 11,000	100	100.0
水 稲 作 付 田	1,592,000	△ 8,000	100	70.0
水稲以外の作物のみの作付田	407,300	△ 4,500	99	17.9
夏 期 全 期 不 作 付 地	273,400	300	100	12.0

(2) 夏期における田本地の利用状況の動向をみると、米の生産調整が実施されて以降、米の生産調整面積の変動による増減はあるものの、水稲作付田は減少傾向で推移し、夏期全期不作付地については増加傾向で推移している（図13）。

図 13 夏期における田本地の利用状況の推移

